

# 「いのち」テーマに 日常の光を描きたい



児童文学作家  
さしだ かず  
指田 和さん

プロフィール 児童向け雑誌の編集などを経て、いのちや平和をテーマにしたドキュメンタリー絵本を多数執筆。「あの日をわすれない はるかのみまわり」(PHP研究所)、「ヒロシマのピアノ」「ヒロシマのいのちの水」「海をわたったヒロシマの人物」(以上、文研出版)、「はしれ、上へ! つなみてんでんこ」「あしたがすぎ」「ぼんやきゆう」(以上、ポプラ社)など。2019年7月に出版した「ヒロシマ 消えたかぞく」(ポプラ社)が2020年度青少年読書感想文全国コンクール課題図書に指定される。

## 初めての絵本

### 「はるかのみまわり」

小さいころから本が好きだったことはありますが、子どもの本の作家をめざしていたというわけではなくて、でもやっぱり子どもは好きだなと思っていました。絵本を1冊つくると道がひらけていって、題材を探して書くというより、行った先々でいろんなひとたちとつながって、本になっていった感じですね。

大学で福祉を学んだあと、もともと私の実家(旧吹上町)が農家だったこともあり、農業関係の出版社に就職しました。たまたまそこで子ども向け雑誌に配属されました。当時は自由な時代で、いろいろなところへ取材に行き、それを記事にすることがとてもおもしろかったです。それからトータル10年間、雑誌や本の編集に携わりました。

その後、アメリカ留学などをへて、2003年の春にラジオを聞いていたら、阪神淡路大震災(1995年)で亡くなったはるかちゃんのみまわりのことが紹介されました。はるかちゃんが亡くなっ



あの日をわすれない  
はるかかひまわり  
指田和子 文  
鈴木びんこ 絵  
PHP 研究所

たガレキの跡地に咲いたひまわりは、「はるかかひまわり」と呼ばれて、遺族が復興の象徴として広げていきました。大切な友人が神戸にいたことから、震災前はよく遊びに行っていました。震災後も2年ほどボランティアで、はるかかひまわりのお話を聞いて、「ドキッ」と思いました。「このままにしているのか」という思い。そしてなにかお手伝いができたらという気持ちで通い始め、遺族と深くかわるようになり、2005年に絵本「あの日をわすれない はるかかひまわり」(PHP研究所)を書きました。

震災の遺族の方たちは取材が難しいところもありましたが、他の遺族の方やボランティアの方に、とても助けられたんです。みなさん、遺族のなかでは話ができると、外に出ると「もう8年も経

っているのに、まだひきずっているのか」などと言われて話せないことも多かったようです。それを逆にこちらがお茶を飲みながら聞いたりとか、関わりがなかでできた絵本なので、完成したときにはみんなが喜んでくれました。1回行って、話を聞けば絵本は書けるかもしれない。でも、現地の人たちと交流するなかで見つかる「それだけじゃない何か」を大切にしたいと思いはじめました。

2005年の震災の日(1月17日)、毎年神戸市内でおこなわれる慰霊の催しでボランティアをしているときに、広島から来ている「ひまわりおじさん」を紹介されました。その「ひまわりおじさん」こと田原さんに、「いつか広島に来んさい」といわれて、「広島に行きたいな」と思いました。

せっかく行くなら夏に行こうと、その年の夏に広島旅行を計画しました。田原さんが住んでいる広島市のとりの海田町の町花がひまわりで、田原さんは町で「はるかかひまわり」を育てていたんです。訪ねると「せっかくだから、町の慰霊祭にも参列しい」と声をかけてくれました。そこでこのちに絵本のテーマになった、50年間原爆慰霊碑に献水をつづけて

いる宇根さんというおばあちゃんや、被爆ピアノの普及活動をする人たちに出会いました。不思議なきっかけですよ。

## 被爆ピアノとの 出会い

05年末には、広島で知り合った人に被爆ピアノを再生して広める活動を手伝ってほしいと連絡をもらいました。「手伝うにしても、まずは知りたい」と翌年、広島市内の中学校で開催された被爆ピアノのミニコンサートに参加しました。そこで、中学生の男の子が弾く元気なピアノの音に、被爆ピアノの悲しいイメージが覆され、もっと知りたくなりました。これがきっかけとなってできたのが、「ヒロシマのピアノ」(文研出版・2007年)です。被爆ピアノといっしょに、全国各地を巡りながら執筆しました。

中学校のコンサートのときにも、絵本ができて広島のお好み焼き屋さんでお披露目会をしたときにも、宇根さんは参加していました。「私は古い先短かいから」と笑いながらも、彼女は自身の戦時中の

体験を熱心に語ってくれました。彼女は当時、被爆ピアノの持ち主の女の子が被爆した場所（工場）にあった保育園で祖母さんを探していたのです。被爆直後に子どもたちを探して広島を歩いていたときに、たくさんのひとが水を求めて亡くなっていたのを見て、宇根さんは戦後、50年間にわたって広島市内だけでなく、各地の原爆慰霊碑に献水するようになりしました。ウネさんのお話が、「ヒロシマのいのちの水」（文研出版・2009年）という絵本になりました。

私は、文章を書いているとだんだん客観性がなくなってしまうので、「感情論だけで書いてはいけないな」と思って、本の最後にはかならず解説を入れるようにしています。広島の平和記念資料館に資料をお借りすることもあり、資料館に通っているときに、展示のなかで赤い着



ヒロシマのピアノ  
指田和子 文  
坪谷令子 絵  
文研出版

物の人形に出会いました。それがもとで、「海をわたったヒロシマの人形」（文研出版・2011年）を書きました。

アメリカ軍の兵士が広島で拾った人形が、アメリカに渡り60年間大切にされていました。実際にアメリカのテキサス州に行くと、人形を持っていたナンシーさんにお話を聞きました。ナンシーさんの娘さんが現地の小学校の先生で、小学校でお話をする機会をつくってくれました。テキサスという土地は、どちらかというと「原爆が戦争を終わらせたんですよ」という意識が強いのですが、子どもたちに話をする時「それじゃあ、原爆はない方がいいね」という声が出てくる。そういう話ができただけは良かったですね。

## 共に歩みながら書く

鴻巣市出身のいとこが結婚して岩手県釜石市に移り住み、「いつか遊びにきてね」と言われていた矢先に東日本大震災（2011年）がありました。手伝えることがあったら…とボランティアに行ったこ

とがきっかけで、震災による津波から生き延びた釜石の小中学生のことを描いた「はしれ、上へ！ つなみてんでんこ」（ポプラ社・2015年）などの東日本大震災にかかわる絵本を書きました。

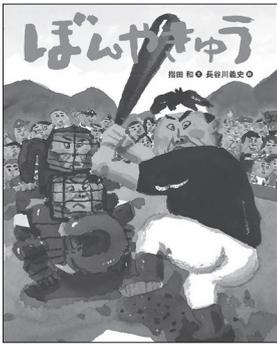
出会った子どもたちは「奇跡の子」と言われていたけれど、実際は普通の子どもたちで、「この子たちが助かった背景には何があったんだろう」と思ったのがきっかけです。震災前、先生たちも最初は手探りで防災訓練をしていたけれど、やがて子どもたちと一緒に「いのちを守る防災」を考え実践していったのです。共に学ぶ姿勢が大事だと感じました。

「ぼんやきゅう」（ポプラ社・2018年）は、被災した旅館や漁師さんのお手伝いをしたり、農産物を使った地域おこしなどにも関わるなかで、津波で中断してしまった「盆野球」のことを知りました。地域の人も「またやりたいなあ」と言っている声が聞こえて、6年ぶりに復活させたいです。

絵本のテーマを決めるときは、「なんでもこういうことになっているの？」という好奇心や疑問が発点です。自分のなかでは、「いのち」というテーマが気になっているのだと思います。でも、思い

出してみると、小学校高学年のときの担任の先生が平和教育に熱心だったことや、小さいころに両親に連れられていった丸木美術館（東松山市）のことも記憶に残っています。初めておこづかいで買った絵本も丸木夫妻の「ヒロシマのピカ」だった気がしますし、当時は意識していなかったけれど、影響を受けていたんじゃないかと思います。毎回重いテーマばかり選んでしまうけれど、そこには人の喜びや楽しみもあるんです。絵本にすることで共有したいそうだと思いますからこそ、やっていけるんだと思います。

例えば被災地では、子どもたちを見守ったり、声をかけたりして、まちの人たちと一緒に復興しているという気持ちで絵本をつくってきました。決しておもねりはしないけれど、関わってくれた人たちが「オレたちの心を分かってくれてい



ぼんやきゅう  
指田和文 絵  
長谷川義史 文  
ポプラ社

る」と思ってくれたり喜んでもらえることが私の喜びです。

戦争や災害など、被害にあった人はなかなか心にの内を言えません。でも、知った人はそれを伝える役割があると思うし、幸い私は伝えられる立場にいます。人生には大変なこともあるけれど、前を向いて生きている人の「日常の光」を描きたいと思っています。

## 学校が好奇心を 育てる場に

昨年7月、「ヒロシマ 消えた家族」(ポプラ社)という写真絵本を出しました。

広島の写真館の企画展で出会った鈴木六郎さん一家の写真。展示は遺品や熱線で溶けた物などが多いなか、「なんで写真があるんだろう」と吸い込まれるように見ていました。資料館の方の紹介で親戚の方が保管していたアルバムをお借りして、2000枚以上の写真と向き合いました。お父さんである六郎さんの書き込んだコメントを読み込んで、何度も何度も見るなかで、まるで鈴木さん一家が

私の親戚のような気がしてきました。いままでも取材したなかで、不思議と一番身近に感じられたんです。

それぞれの小さいころを思い出すからか、この本は年配者からの反響が大きいです。今年、読書感想文全国コンクールの課題図書になったので、子どもたちの感想も聞けるのがとても楽しみです。

先生という仕事は、とてもすばらしい仕事だと思っています。いま新型コロナウイルスの影響で、学校の良が見直されている時期だと思います。安全安心第一で閉鎖的な社会になりがちですが、学校はいろんな体験ができ、子どもたちの心に好奇心の種をまき、大きく育てる場所であってほしいと願っています。

### ◆読者プレゼント

指田和さんの最新作「ヒロシマ 消えた家族」(ポプラ社)を読者3人の方にプレゼントします。本誌の感想をお書きのうえ、左記までお送りください。締め切りは2020年8月31日(月) 当日消印有効。



・さいたま教育文化研究所  
〒330-0063  
埼玉県さいたま市浦和区高砂3-12-24  
埼玉教育会館6F